

阪神・淡路大震災をきっかけに、救命救助ロボットの充実や防災・減災について広く関心をもってもらうために始まった『レスキューロボットコンテスト』。昨年は全国から22チームが参加し、徳島大学ロボコンプロジェクトは総合2位に!!

その際、オペレーション技術も高く評価され、『ベストオペレーション賞』も受賞するという輝かしい成績をおさめました。取材に伺った4月は新入生も加わり、今年度6月24日に開催される同大会予選出場に向けた準備の真っ最中。過去7回の出場経験をもちに反省点やノウハウをいかし、より良い成績を残せるよう改良を加えるのですが、機体を再利用するのではなく、基本、設計から始めるのだとか。

「各チームにTA（ティーチング・アドバイザー）がいて、その人に見聞きに行くこともあるんですが、ほとんどは自分達で考え、解決しています。みんなで集まってひとつのことを成し遂げることが楽しい」と話すリーダーの坂本さん。

広報担当の杉本さんも、「動かすまではただのモノなんですけど、マイコンとつなげて動いた瞬間、ロボットと実感できる。」

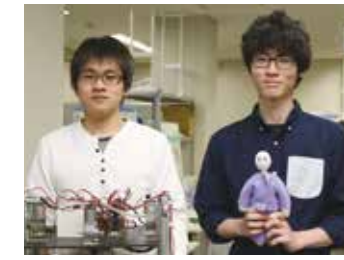
インターンシップの醍醐味は、課題と向き合う苦しみにあり!?

(写真左から)

総合科学部 社会総合科学科 3年 **山川 真生子** (やまかわ まおこ)
 大学院先端技術科学教育部 博士前期課程 1年 **久保 文乃** (くぼ あやの)
 大学院先端技術科学教育部 博士前期課程 1年 **片倉 悠暉** (かたくら ゆうき)
 大学院先端技術科学教育部 博士前期課程 1年 **吉川 直弥** (よしかわ なおや)
 理工学部 理工学科 2年 **新免 歩** (しんめん あゆみ)



災害現場で役に立つレスキューロボットを目指して



徳島大学ロボコンプロジェクトリーダー 広報担当
 (理工学部 理工学科 3年) (理工学部 理工学科 3年)
坂本 和輝 (さかもと かずき) **杉本 仁志** (すぎもと ひとし)

「これまで一番大変だったことは？」と訊くと、杉本さんは「大会1週間前にアームがボキッと折れたとき」。坂本さんは大会前日にもかかわらず、機体が仕上がってなくて、「徹夜で仕上げたこともありました」と話す。成績が上がるにつれ、そうしたギリギリ感は緩和されているそうですが、毎回、「何が起こるか分かりません(笑)」。



3年生が8人、2年生が12人。取材時は1年生5人が新加入していた。

動かした瞬間がオモシロい」と、ロボット制作の魅力を語ります。コンテストは災害現場を模したフィールドで、要救助者にみたくて人形を遠隔操作ロボットを使い、時間内に救助できるかを競います。設置してある様々な障害物をクリアできるかどうかも加点のポイントですが、人形にはセンサーが

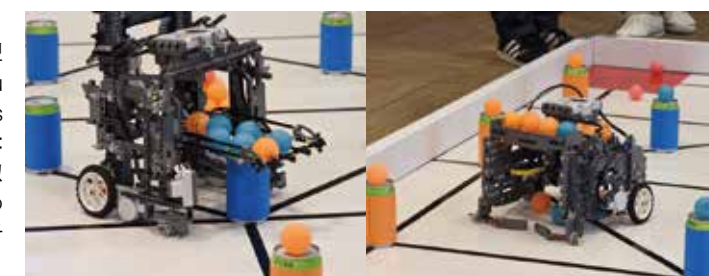
ついていて、機体が触った圧力なども判定基準に。人形にはQRコードがついていて、それを読み取ると「左足負傷」といった状態が示され、左足に触れると減点。このように人形を扱う丁寧さも得点の鍵です。機体の完成度に加え、実用性を想定した高度な機能や操作性も重

要視されるリアルさは、作り手のやる気も刺激します。「本場に災害現場で役に立つような救助ロボットを作りたい」という坂本さん。今年の活躍もさることながら、その先の未来も楽しみです。



第17回レスキューロボットコンテストの様子。コンテストに参加するのは1チーム15人。その中でコントロールルームに入って実際の競技に係わるのが8人。機体を作る班と電子回路を作る班、プログラムを行う班に分かれている。今年の予選は6月24日。本戦は8月11、12日。

「レスキューロボットコンテスト」以外に「四国移動型&自律型ロボットトーナメント(Sikoku Mobile and Autonomous Robot Tournament通称:SMART)」にも出場。2分以内に缶の上のピンポン球を集めて、移し替え、その得点を競う対戦型競技。



徳大生 大活躍!

企業が本気で解決したいと考える課題に、学生インターンと共に取り組む実践力養成型(寺子屋式)インターンシップ。4月下旬に行われたエントリー先を決めるインターンシップフェアには参加企業も来場し、プログラム説明や個別相談会が行われました。このプロジェクトを企画運営しているのはCOC+推進本部事務局ですが、フェアの受付や司会、企業と学生のマッチングのフォローなど、これまでにインターンシップを体験した学生約20名が自発的にサポートするという動きが発生!! さらにコアメンバーの中から「今年にはインターン生と企業を繋ぐマネージメントをしよう」という意欲的な案も誕生しました! 活動を牽引するのはインターンシップ一期生の片倉悠暉さん。「一人ひとりに向き合い、関わってくれた人達への感謝を、次の学生へ送りたい」と積極的に活動しています。



就職先を考えて決める人、現在の研究テーマに添った内容で選ぶ人など、インターンシップへの参加動機は様々。



参加企業は四国放送や公益社団法人建築士会、大塚テクノなど県内16社。学生ならではの発想や行動力に期待し、プレゼンや個別相談にも熱が入る。

同じような思いで自然と集まった有志のみなさんにインターンの経験を聞くと、意外にも「楽しくはなかったです」と苦笑い。課題と真剣に向き合えば向き合うほど、どうしていいか分からなくなり、終わった後も「これでよかったのかな?」とモヤモヤ…。正解も答えもない日々が苦しみ、時間が経ってやっと「やってよかった」と言えるのだとか。

インターンシップでの収穫を尋ねると「尊敬できる大人に出会えたこと」という久保文乃さん。吉川直弥さんは「就職先を選ぶときに、福利厚生など待遇面に目が行きがちですが、その企業の人ができるか、人間関係が良好で働きやすい職場かどうかなど、これまでとは違う角度で企業を見ることのできるようになった」と話してくれました。

「若い時の苦労は買ってでもせよ」といいますが、見事、成長を遂げたみなさん。インターンシップサポーターとしての新たな挑戦にもエールを贈ります。